実践
ガイドブック
GuideBook

北の住まいるタウン

誰もが安心して心豊かに住み続けられるまち・地域

北海道

北の住まいるタウン

へようこそ！

北海道には、表情豊かな四季を有する気候風土や自然環境、豊かな森林資源、安全でおいしい食とそれを支える農・畜産・漁業等のなりわい、多様なエネルギー資源、寒冷地で住まうための優れた工夫や技術など、多くの地域資源があります。

こうした地域資源を最大限に活用した「北海道だからできる」まちづくり。これが、北の住まいるタウンの取組です。

　このガイドブックは、自治体職員が、まちづくりの重要なパートナーである地域住民、地域団体、民間事業者等と連携しながら、「北の住まいるタウン」の実現に向けた取組を考え・実践していく際に参考としてご活用いただく手引きとして作成しました。
（また、本取組に関連する支援事業を別冊としてまとめました。あわせてご活用ください。）

あったかいごはんに宿る想いが紡ぐ物語。

☞P42

北の住まいるタウン モデル市町村

当別町　共生型コミュニティー農園　ぺこぺこのはたけ

広くゆったりした店内。笑顔で迎えてくれる店員さん。「ぺこぺこのはたけ」は、社会福祉法人が地域の方々と共同で整備したコミュニティー農園。高齢者の生きがいづくりや、障がい者の働く場となっています。当別町の基幹産業である農業を活かした地産地消の本格レストランも併設され、遠方からお客さんが来るだけではなく、地域の交流の場にもなっています。

廃油で動かすコミュニティバスは、エコとハートを運ぶ。

☞ P42

北の住まいるタウン モデル市町村

当別町　（有）下段（しもだん）モータース

当別町で自動車整備・バス運行等に携わる（有）下段モータースの技術で、天ぷら油などの廃油がバイオディーゼル燃料として生まれ変わり、町民の移動手段を支える。当別町では、大学や企業が独自に運行していたバスの一元化や、町民や飲食店による廃油の提供など、官民連携でコミュニティバス「当別ふれあいバス」を運行しています。出かけたいときに出かけられる移動手段を確保しながら、低炭素化・資源循環も実現する一石二鳥の取組です。

発想の転換でエネルギーを生み出し新たな産業を展開する。

北の住まいるタウン モデル市町村

☞ P46

鹿追町　環境保全センター
（バイオガスプラント）

使い道がないと思われていたものをエネルギーに変える発想の転換。環境保全センターでは、家畜ふん尿や家庭から出る生ごみを発酵させ、その際に出るメタンガスを利用して発電を行っています。また、発電機から出る余剰熱を活用して、チョウザメの飼育、さつまいもやマンゴーのハウス栽培といった新たな産業を展開しています。

100人の知恵と笑顔があつまって地域のミライを描く。

☞ P49

北の住まいるタウン モデル市町村

鹿追町　しかおい100人ひらめき会議

地域には、様々なアイデア、特技、思いをもった人がきっとたくさんいるはず。それらをまちづくりにつなげ、自分たちごととしてまちづくりに取り組めないか。鹿追町では、こんな思いを共有した地元有志が実行委員となり、「しかおい100人ひらめき会議」を企画・開催しました。子どもからお年寄りまで85名が一堂に会し、50を超える取組アイデアが出されました。知恵と笑顔でいっぱいのまちづくりは、地域の明るい未来を描きます。

index 目次

1 1章 はじめに 10

1-1 北海道が直面する課題 10

1-2 北海道の強み 10

1-3「北の住まいるタウン」の目指す姿 11

2 2章「北の住まいるタウン」の3つの取組 12

2-1 コンパクトなまちづくりの取組 12

2-2 低炭素化・資源循環の取組 12

2-3 生活を支える取組 13

3 3章 取組を考えるうえで大切な視点 15

3-1 地域の資源や課題を見つめる 16

（1）資源を多様な方法でリストアップする

（2）課題はマクロな視点とリアルな視点の両面から把握する

3-2 地域のステークホルダーを探し思いを共有する 18

（1）地域の鍵になる人を知り、つながる

（2）地域の未来を描き、前向きな気持ちを共有し、取組の機運を高める

3-3 外の知識や技術、ネットワーク、資金を活用する 19

（1）若い力をまちづくりのエンジンにする

（2）専門的な技術や知見を活用する

（3）民間の資金や経営ノウハウを取り入れる

3-4 小さな成果から共感の輪を広げ、地域ぐるみで持続できる取組とする 20

（1）地域ぐるみで話し合う機会をつくる

（2）お試し実践で成功体験を共有する

3-5 未来の可能性を見据えて取組を考える 22

（1）今の取組が未来にどうつながるかを意識する

（2）暮らし方・働き方を変える新たな技術の開発や運用動向に着目する

3-6「掛け算」で相乗効果が生まれるようにする 23

4章 事例に学ぶ取組のヒント 24

4-1 コンパクトなまちづくりの取組にあわせた掛け算のヒント 24

（1）コンパクト化を通じたまちの再編

例）北海道釧路市：都市機能の集約化によるコンパクトなまちづくり 24
例）北海道帯広市：市街地拡大の抑制と居住環境の充実 25
例）北海道沼田町：農村型コンパクトエコタウン 26

（2）民間の資金やノウハウを活用し施設を集約する

例）岩手県紫波町：公民連携手法を組み合わせてつくったまちなかの魅力ある暮らし 27
例）北海道室蘭市：多世代交流の促進を担う生涯学習センターの整備 28

（3）まちの空き家や空き地を活用して必要な機能を加える

例）山形県鶴岡市：空き家や空き地の利活用マネジメントの仕組みづくり 29

（4）まちに魅力やにぎわいを生む工夫をする

例）北海道富良野市：中心市街地のにぎわい滞留拠点フラノマルシェの取組 30

4-2 低炭素化・資源循環の取組にあわせた掛け算のヒント 31

（1）地域の資源をエネルギーに変えて最大限活用する

例）北海道下川町：森林資源のカスケード利用によるゼロエミッションの取組 31
例）北海道稚内市：風・太陽など地球にやさしいエネルギーのフル活用 32

（2）発想の転換で資源を開発・活用する

例）北海道夕張市：炭鉱のまちならではのCBM開発とエネルギーの地産地消 33

（3）資源を地域で循環する仕組みをつくる

例）熊本県小国町：「木の駅」と地域通貨の活用による資源循環の仕組みづくり 34

（4）地域ぐるみで環境保全や環境教育を進める

例）北海道足寄町：エネルギーの未来を学ぶ見学コースの設定 35

4-3 生活を支える取組にあわせた掛け算のヒント 36

（1）支え合いの力を引き出す

例）高知県梼原町：総合的な生活支援拠点・集落活動センターを中心とした取組 36

（2）コミュニティを育む拠点をつくる

例）北海道寿都町：多世代が集うコミュニティレストラン 37

（3）地域の魅力を外に発信し、地域の応援団を増やす

例）北海道中川町：都市間交流による新たなファンとニーズの掘り起こし 38
例）北海道ニセコ町：地域資源を活用した観光産業振興の取組 39
例）和歌山県有田川町：ポートランドから専門家を応援団に住民意識を高める取組 40

5章 始まっています「北の住まいるタウン」の取組 41

5-1「北の住まいるタウン」モデル市町村 41

5-2 北海道当別町における「北の住まいるタウン」の取組 42

5-3 北海道鹿追町における「北の住まいるタウン」の取組 46

「北の住まいるタウン」の取組の推進に向けて 50

1章 はじめに

1－1 北海道が直面する課題

公共施設等の集約や効率的な土地利用による都市のコンパクト化

北海道は都市が広域に分散する構造を有しており、インフラの整備や維持管理、暮らしを支える様々なサービスの提供などの点において、財政的な負担も大きく、非効率的な状況と言えます。

都市の持続可能かつ効率的な運営という観点から、歩いて暮らせる身近な範囲に、公共施設や生活支援施設が集約したコンパクトなまちの形成が求められます。

そして、点在する暮らしの場、働く場（小さな生活圏）を交通ネットワークによりつなぐ多極分散型の都市像が１つのヒントになります。

地域産業の振興と働く場づくり

経済の成長段階から成熟段階へと移行した現在、北海道においては経済・雇用の低迷が続いています。一方で、北海道に魅力を感じた道外の人々が居住の地を求める機運の高まりもみられています。

地域で働きながら、地域の魅力を享受できる暮らし。そんな暮らしの実現を担う産業や雇用の振興が求められています。

コミュニティや暮らしの維持・継承

人口減少や少子高齢化、ライフスタイルの変化等により、地方の過疎化は今もなお、著しく進行しています。

長く親しんだ地域で暮らし続けるために、地域住民の支え合い、生活を支えるサービスや仕組みの維持・継承が求められています。

1－2 北海道の強み

優れた自然環境と高い食料自給力

太平洋、日本海、オホーツク海という３つの大海に囲まれ、大雪山系など雄大な山岳、北海道の面積の約７割を占める森林、釧路湿原に代表される広大な湿原、美しい風景を織りなす河川や湖沼といった水辺の環境など、四季折々で変化をみせる豊かな自然環境があります。

このような自然の恵みを背景に、北海道は、海や大地の新鮮で豊富な素材を生かした安全でおいしい魅力ある食の宝庫として、食料自給率が約200％で推移しているなど、我が国有数の食料供給基地となっています。

豊富なエネルギー資源

北海道の各地で、太陽光・風力・地熱・雪氷・森林・農業残さなどの新たなエネルギーの活用が進められています。

北海道の各種エネルギーの賦存量は、多くが全国において上位であり、その積極的な活用は、自立的な地域運営の仕組みづくりにとって、大きな強みとなります。

国内外の移住者などを引きつける北海道の魅力

北海道には、豊かな自然に触れながら、自分や家族との時間を大切にできる生活を求め、首都圏などから、移住や二地域居住をする人が増加しています。

また、環境学習、都市間交流、スポーツ合宿など、一定期間滞在する地としての側面もあります。こうした人たちが、北海道の魅力に触れ、北海道のファンとなり、いつしか、北海道のまちづくりの担い手や応援団となる可能性に着目することも大切です。

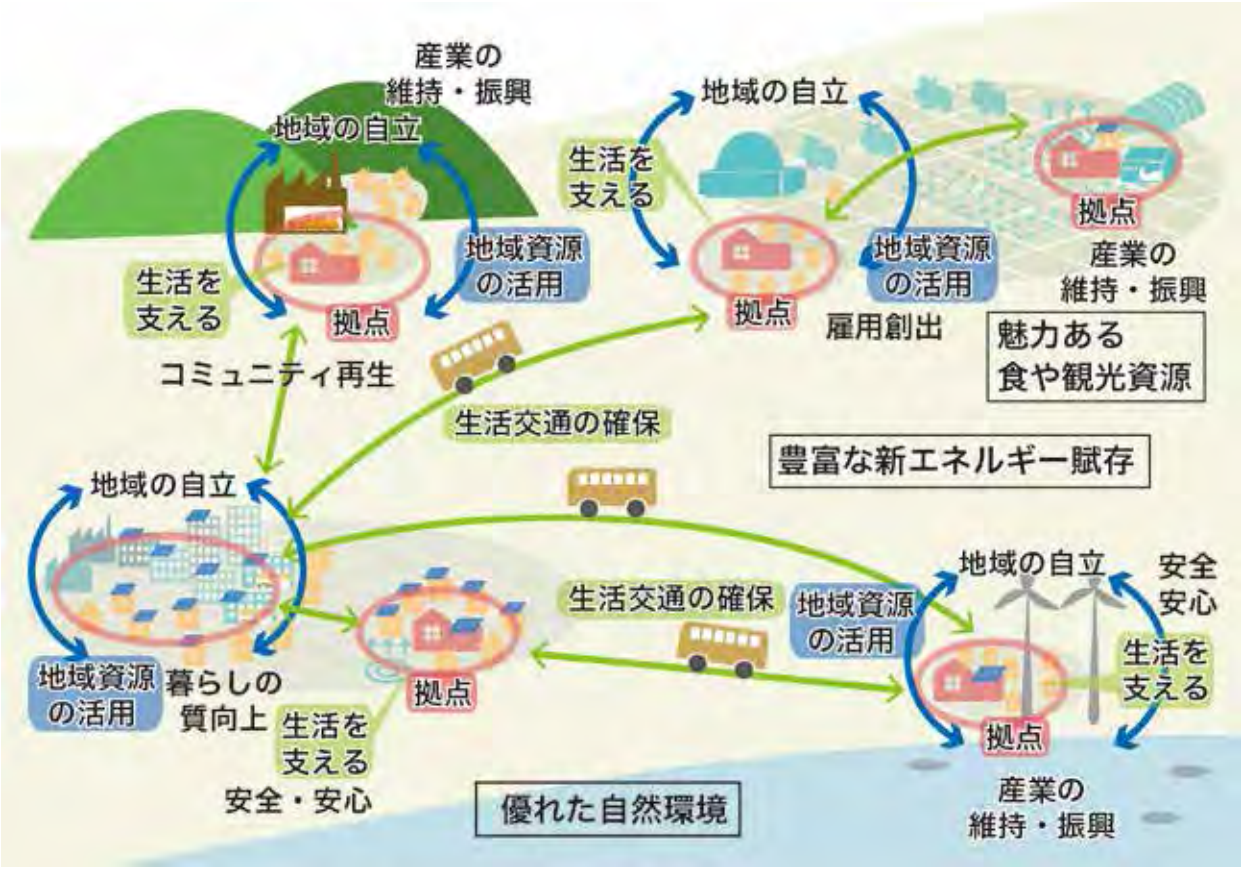
1－3「北の住まいるタウン」の目指す姿

北海道の優位性が活かされ、地域特性に応じ、安全・安心で暮らしやすく、資源循環が進んだ効率的な都市構造を有する、誰もが安心して心豊かに住み続けられるまち・地域

誰もが安心して心豊かに住み続けられるまち・地域づくりに向けて、広域に分散しているまち・地域を有し、一次産業を基幹産業とする北海道においては、単なる一極集中によるまちのコンパクト化ではなく、地域の特性を踏まえ、地域毎に生活の拠点をつくりながら、まちをコンパクトにしていく取組が考えられます。

そして、拠点同士を交通でつなぐとともに、拠点を活用して生活を支える機能やサービスを充実させることにより、住み慣れた地域に住み続けることができる環境を整え、その地域に豊富に存在するエネルギーや、豊かな自然環境、魅力ある食や観光資源などの地域の様々な資源を活用することで、地域の自立的な運営が促進され、安全・安心な暮らしの質の向上、コミュニティの再生、地域産業の振興、雇用の創出につながっていくことが考えられます。

わたしたちは、人口減少や超高齢化など、これまで経験してこなかった新たな時代の到来を迎え、持続可能なまちづくりのために、人々の暮らしをどのように未来へつないでいくか、多様な主体の知恵やノウハウを集結し、多岐にわたる様々な課題の解決に向けてチャレンジしていく姿勢が問われています。



「北の住まいるタウン」の目指す姿